

実践報告

「社会人基礎」と「キャリア教育」統合の試み

－ 大学院での実践事例を通して

梶原 宣俊

「社会人基礎力」は、2006年経済産業省が経済界のニーズに対応して学校教育に強く要求している能力である。大学においてもその育成の試みや授業がなされているが、この能力育成は本来「キャリア教育」の中身であり、根幹として位置づけられるべきものであると考えられる。さらに、近年、各省庁・団体から数多くの「能力育成目標」が提案されているが、これらの能力もまた用語の違いこそあれ、多くの共通性を含んでいる。本研究は以上の背景を踏まえ、特に「社会人基礎力」と「キャリア教育」の統合を試み、独自のテキストと授業方法を開発実践してきた実践事例を報告し、授業アンケート分析結果を通じて、「社会人基礎力」は「キャリア教育」の中に取り込むことが可能であることを示唆し、先行研究も含めて今後の大学・大学院での「社会人基礎力」及び「キャリア教育のあり方」について考察する。

キーワード： 社会人基礎力、キャリア教育、教育改革、大学教育、専門職大学院

1. はじめに－研究の背景・目的・方法

「社会人基礎力」とは経済産業省（以後経産省という）が2006年（平成18）から、経済界のニーズに対応して学校教育に強く要求している能力である。1970年代には、各企業が企業内教育で実施していた教育内容を、企業の余裕がなくなり学校教育へ求めてきたと考えられる。さらに、ビジネス・教育・若者・雇用環境の変化が背景にあると考えられる。経産省は、かつて連動していた「学力」と「社会人基礎力」が遊離してきていることを指摘して、あらためて「組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」を「社会人基礎力」として提唱してきた。その中身を「3能力12要素」に整理して、大学の正課科目や、インターシップ、産学連携等を通じて育成することを要求している¹⁾。そして、2007年9月から「社会人基礎力」を育成するモデル事業を7大学において実施、産学連携の授業としてPBL（課題解決型学習）や「実践型インターンシップ」の普及を試みている²⁾。経産省は、「社会人基礎力」の育成を重視した「キャリア教

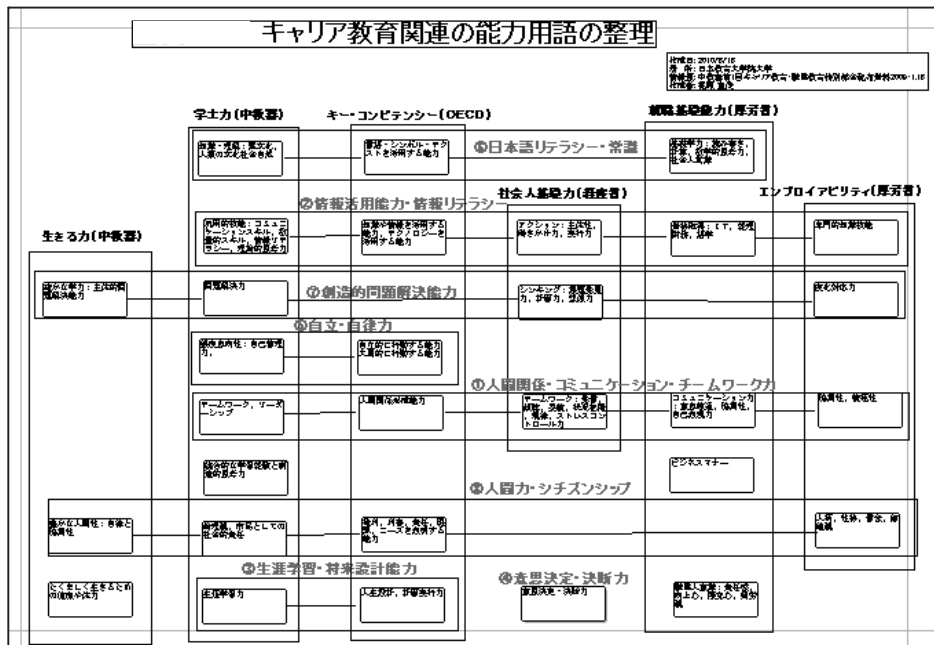
1 日本教育大学院大学 学校教育研究科

育の促進」を主張はしているが、「社会人基礎力」をまた別個に学校教育で普及させることに関しては若干の疑義がある。なぜならば、「社会人基礎力」である「3能力12要素」とは、アクション（主体性・働きかけ力・実行力）シンキング（課題発見力・計画力・創造力）チームワーク（発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力）のことであるが、これらの能力は、「キャリア教育」がめざす能力育成とほぼ同じであるように見受けられる。

文科省が1999年から推進してきた「キャリア教育」の定義は、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」³⁾となっている。さらに、2009年には「キャリア教育・職業教育特別部会」が職業教育との違いを意識して「勤労観・職業観や知識・技能をはぐくむ教育のうち、勤労観・職業観の育成に重点を置いた基礎的、汎用的教育」と定義している⁴⁾。これらの抽象的内容を具体化すれば、「社会人基礎力」となり、経産省もキャリア教育や「学士力」との関連で導入するように提言している⁵⁾。

また、寿山泰二（2007）は「キャリア教育と職業教育」のなかで、「キャリア教育」と「社会人基礎力」の連携を主張しながら、「社会人基礎力」だけでなく、政府や産業界から様々な類似語が発表され、現場での混乱に拍車をかけており、縦割り行政を排して統一性や整合性をもたせるべきだと主張している⁶⁾。筆者も同感であり、ここで諸能力を整理しておきたい。「生きる力」「学士力」（中教審）、「キー・コンピテンシー」（OECD）、「社会人基礎力」（経済産業省）、「就職基礎能力」「エンプロイアビリティ」（厚生労働省）等の用語を縦軸にして、具体的能力を横軸で整理すると以下の8能力に整理することができる。（図表1参照）

図表1



- ①人間関係・コミュニケーション・チームワーク力
- ②情報活用力（情報リテラシー）
- ③生涯学習・将来設計能力
- ④意思決定・決断力
- ⑤自立（自律）力
- ⑥日本語リテラシー（表現力）・社会常識
- ⑦創造的問題発見・解決力
- ⑧人間力・シティズンシップ

これらの8能力が「基礎的汎用的能力」の中身であり、2004年の「キャリア教育推進に関する総合的調査研究協力者会議」の「4領域8能力」、2003年内閣府の「人間力戦略研究会」の「人間力」、最近の「就業力」もすべてこの8項目に集約すること可能であると思われる。「学校での学びと現実社会を結びつける」ことがキャリア教育の目的であり、それは具体的には「社会人基礎力」を含む前述した諸能力を育成することと密接不可分の関係にあると考えられる。

本研究は、以上のような問題意識に基づき、「社会人基礎力」を中心とする「基礎的汎用的能力」（8能力）の育成と「キャリア教育」の統合を試みるために、独自のテキスト（国立K大で使用してきたキャリア教育テキストを改訂）を作成し実践してきた事例報告を通して、その統合の可能性を具体的に示唆しようとするものである。

2. 実践事例

本学（日本教育大学院大学）は、「学校教育に新風を」というスローガンのもと、「社会人経験のある教師の育成」による教育改革をめざして2006年に建学された、日本初の教員養成専門職大学院（株式会社立）である。しかしながら、近年、大学新卒（いわゆるストレートマスター）の入学者が増加してきたこともあり、実験的に、特別授業「社会人基礎」（正課外、単位なし、自由選択、半期15回）を、「キャリア教育」との統合を試みながら実践してきた。教員養成の専門職大学院なので、「社会人基礎力」を体得しながら、教員としての生涯キャリア形成、及び中学・高校におけるキャリア教育の進め方にも配慮してすすめてきた。授業シラバスは以下の通りである。カッコ内の数字は、各回で中心となる、前述した「8能力」の対応番号である。

1. 授業のねらい

社会人基礎力を体得し、教師としてのキャリア開発計画を創り上げ、主体的に学び生きる力を育成する。社会人とは何か、社会人経験とは何かを考え、経済産業省が推進している「社会人基礎力」（アクションシンキング・チームワーク）を踏まえながら、社会人としての幅広い視野や人間関係

力、社会常識やマナー、柔軟性やチームワーク等を休得するとともに、自己分析・現実分析を通じて教師としての適職・天職を見極め、キャリア開発計画を作成する。

2. 授業の方法

「カード式情報リテラシー授業法」「読解図解法」「カード式キャリアデザイン法」等による講義、討議、演習、個人作業、グループワーク、レポート作成、発表を行う。

3. 授業計画

- ①オリエンテーション（カード式情報リテラシー授業法と学び方と実学の思想）（2、3）
- ②社会人基礎力チェックシートによる自己分析—社会人（経験）とは何か・仕事の基本（5、6）
- ③アクション（行動力訓練）・発声練習と挨拶マナー（演習）（1、8）
- ④シンキング（思考力訓練）・KJ法による創造的思考や図解読書法演習（2、6、7）
- ⑤チームワーク（集団訓練）・リーダーシップとフォロワーシップ（1、7）
- ⑥コミュニケーション力・傾聴と自己表現（ロールプレイとグループワーク）（1、6）
- ⑦人間関係力・TA（交流分析）による自己理解と他者理解・ジョハリの心の窓（1、5）
- ⑧キャリアとは何か—キャリア教育の本質と方法・学校におけるキャリア教育（3）
- ⑨キャリア形成・キャリア教育・就職支援の基本構造とプロセス（3）
- ⑩カード式キャリアデザイン法によるキャリア分析—自分の強みや長所を客観的に理解する（演習）（5）
- ⑪時代・企業・社会の変化と新しい教師像—学校現場分析図解（演習）（3）
- ⑫適職・天職探索・意思決定、キャリア開発計画作成（演習）（4、3）
- ⑬教師・学校・教育とは何か—教育改革と21世紀の教育（8）
- ⑭3C教育—日本の伝統文化教育・平和教育・シティズンシップ教育（8）
- ⑮感想図解、まとめと復習（口頭発表とレポート）

テキスト：オリジナルテキスト「図解キャリアデザイン」（A4版134p）

4. 参考文献

授業中にその都度紹介する

<実施概要>

- ・1回目 2009年10月～2010年2月、後期15回（1コマ90分）受講者1年生5名（男4女1）
- ・2回目 2010年4月～2010年7月、前期15回（1コマ90分）受講者1年生4名（男3女1）
- ・受講者の出席率80～100%

<授業の概要>

①オリエンテーション（カード式情報リテラシー授業法と学び方と実学の思想）

最初に「カード式情報リテラシー授業法」を説明し、「学ぶ」ことの意味、本質を講義した。「カード式情報リテラシー授業法」とは、『教育総合研究第2号』でも紹介したもので、毎回の授業で

もっとも大事であると思ったことや印象に残ったことをカード（1枚30字前後、記名式）に書き提出させ、14回の講義が終了した時点で、そのカードを本人に返却し、図解とレポートを作成・発表させるという方法である。この方法のメリットは、授業を熱心に聴くようになり、毎回大事な情報を自ら選択し、記述するという「情報活用力」の訓練になる点である。最後はその毎回選択した情報を図解化することにより、学びのプロセスを振り返り、構造化して学びのまとめ・総復習を行う。このオリエンテーションで大事なポイントは、「学びと行動を統合する」という「学びのパラダイム転換」である。陽明学やプラグマティズムの思想哲学を紹介しながら「実学の思想」（実践の尊重）を講義し、各自のこれまでの学び方を振り返り発表してもらう。

②社会人基礎力チェックシートによる自己分析ー社会人（経験）とは何か・仕事の基本

経産省の資料に基づき「社会人基礎力」の講義とキャリア教育との関連を説明し、公開されているチェックシートによる自己分析・自己理解を行う。その後、全員でブレインストーミングを行い、グループワークで図解を作成し発表する。発表には必ずコメントをする。以後、3つの能力□アクション・シンキング・チームワークの体験学習を3回に分けて行った。

③アクション（行動力訓練）・発声練習と挨拶マナー（演習）

アクション・行動力は「実学の思想」を講義・復習し、「実践行動」の大切さを強調し、毎回の授業で学んだことを即実行する訓練・習慣をつけさせた。「複式呼吸法・姿勢・発声法・挨拶マナー」を体験学習させ、毎回の授業で実行させた。

④シンキング（思考力訓練）・KJ法による創造的思考や図解読書法演習

「脳と記憶と思考と表現」の全体構造及び「インプット・スループット・アウトプット」として「学び・考える・表現する（書く話す）」⁷⁾ことの関係構造を講義する。演習としてKJ法⁸⁾を応用した「読解図解法」⁹⁾を説明し、好きな本を熟読してカードに書きぬき、図解化・文章化を宿題にして、翌週その発表を行った。

⑤チームワーク（集団訓練）・リーダーシップとフォロワーシップ

チームワークは、「価値の序列」による「グループの意思決定・グループダイナミクス」の体験学習を行い、チームワーク・リーダーシップ・フォロワーシップの講義を行った。リーダーには、具体的に人を動かす力・パワーとして、「ポジションパワー・プロフェッショナルパワー・パーソナルパワー」の3つが必要であり、それは本学のカリキュラム理念である「人間力・教育力・社会力」にも対応していることを説明した。

⑥コミュニケーション力・傾聴と自己表現（ロールプレイとグループワーク）

コミュニケーション力の基本である「話の聴き方」訓練を、ペアになり、ロールプレイで体験学習をして、「聴く」ことの大切さや聴き方のポイントを講義した。最後に、学び・自己表現・コミュニケーション・情報リテラシーの関係構造を講義し、コミュニケーションの本質について考えさせた。授業を受けることも、教師と学生のコミュニケーションであり、無表情・無反応ではなく、学んだことを毎回の授業で実践するように促した。

⑦人間関係力・TA（交流分析）による自己理解と他者理解・ジョハリの心の窓

「ジョハリの窓」を講義し、「傾聴」や「自己開示」が人間的成長・人間関係力に大きく関係することを強調した。次に「TA（交流分析）」の講義と実習を行った。エゴグラムによる自己分析と友人による他者分析を行い、他人は、自分が考えている自分（自己像）をそのまま理解してくれないことを体験させ、客観的自己理解力・人間関係能力の向上の難しさと大切さを強調した。ここまでは、キャリア教育の基本となる「社会人基礎力」の学習と訓練である。

⑧キャリアとは何かーキャリア教育の本質と方法・学校におけるキャリア教育

以上を踏まえながら、後半は「キャリア教育の理論と方法」について理論と実践の両面から講義と演習を行った。まず、「今なぜキャリア教育や生涯キャリア形成が重要になってきたか」を時代背景、企業・雇用環境の変化を中心に具体的に講義した。次に、キャリア教育の歴史（日米）を説明し、「教育改革の理念・方針としてのキャリア教育の本質」を講義した。最後に、小中高大学におけるキャリア教育の実態と課題について問題提起した。

⑨キャリア形成・キャリア教育・就職支援の基本構造とプロセス

キャリア形成・教育と就職支援との関連構造を文科省の6段階理論に基づき講義した。次に、「キャリアの視点から進路指導・就職支援を考える」というこれまで高校や大学で講演してきた図解に基づき、現代の子どもや若者の変貌・置かれている状況を踏まえながら、具体的な指導助言・支援方法をわかりやすく説明した。「今、ここに全力集中すること」や「好きなことを発見し、育て、仕事に結びつけること」「自分で納得のいくキャリアデザイン・職業目標を決めること」が大事であることを強調した。

⑩カード式キャリアデザイン法によるキャリア分析ー自分の強みや長所を客観的に理解する（演習）

中心は「カード式キャリアデザイン法」¹⁰⁾の実習で、まず、自分史に基づく「自己キャリア分析」を図解化し、発表してもらった。この発表は、制限時間を大幅に超えてみんな20分ほど熱心に発表した。次に、この図解に基づき「自己PR文」を作成し発表することを宿題にした。

⑪時代・企業・社会の変化と新しい教師像ー学校現場分析図解（演習）

時代の変化、特に戦後政治経済社会の変化及び学校教育の変化、子ども若者の変化を中心に講義し、討議した。その過程で新しい教師像を考えさせた。学校現場の分析図解は時間がなく宿題とした。さらに、適職・転職探索シートに、自己分析図解と学校現場分析図解を参考にして、自分の適職・天職ベスト3から5まで優先順位をつけてくるように指示した。

⑫適職・天職探索・意思決定・キャリア開発計画作成（演習）

宿題に基づき、各自の適職・天職ベスト3～5を発表してもらう。当然のことながら、全員1位は教師である。しかし、2位以下には音楽家等の個性的なものも見受けられた。ここで、目標の確認、意思決定を確実なものにしてから「キャリア開発計画」の作成にはいる。とりあえず、卒業までの計画を学習、資格、生活経済を含めて作成するよう指示した。次に、目標達成のための具体的

方法を、AIAの「ダイナミック3V方式」¹¹⁾に基づいて講義した。「人間は自分が考えたとおりの人間になる」という4000年前のヒンズー教の言葉を紹介し、夢や目標を達成するためには「バーバライズ（言葉に表し、公表する）」「ビジュアルイズ（具体的イメージに描く）」「バイタライズ（計画的に継続・努力する）」の3つが必要であることを講義した。最後に、筆者自身のキャリア形成史を語り、計画を立ててもその通りにいくとは限らず、柔軟に対応することも大切であることを克蘭ボルツの「計画された偶発性」を引用しながら強調した。

⑬教師・学校・教育とは何か―教育改革と21世紀の教育

教師・学校・教育とは何かについて、筆者自身の経験と考え（恩師論・21世紀教育への提言）を発表して、問題提起を行い、内田樹の「街場の教育論」を下敷きに、これからの新しい教育の在り方について議論した。

⑭3C教育―日本の伝統文化教育・平和教育・シティズンシップ教育

最後に、イギリスの「3C教育」¹²⁾を参考にしながら、キャリア教育・カルチャー教育・シティズンシップ教育の3本柱について講義した。さらに、これからは「戦争・平和教育」や「政治・宗教教育」「伝統文化教育」が大切になることを強調して、すべての講義を終了した。これまでの授業感想カードを本人に返却し、図解とレポートを宿題にした。

⑮感想図解、まとめと復習（口頭発表とレポート）

最後の授業は、学生の「学びのまとめ」としての授業感想図解とレポートの発表である。一人ひとりの発表に対して最後のコメントを行った。ここで「授業後アンケート」を記入してもらい、終了である。授業前後のアンケート結果については次の項で詳しく分析、考察する。

3. アンケート調査結果と分析・考察

授業前後で「図表2」のようなアンケート調査を実施し、授業の評価を行った。20項目の質問に対して、4段階評価（1：強く思う 2：だいたい思う 3：あまりそう思わない 4：まったく思わない）で答えてもらい、授業前後の変化を個人ごとにグラフ化し、（図表3参照）さらに、全体的傾向を見るために、項目ごとに評点を合計して平均値をだし、グラフ化した。数値は各段階評価を1：4点、2：3点、3：2点、4：1点として換算し、グラフ化した。（図表4参照）質問項目1～9が「社会人基礎力」関連であり、10～20がキャリア関連の質問項目である。

図表2 特別授業「社会人基礎」 授業前後アンケート

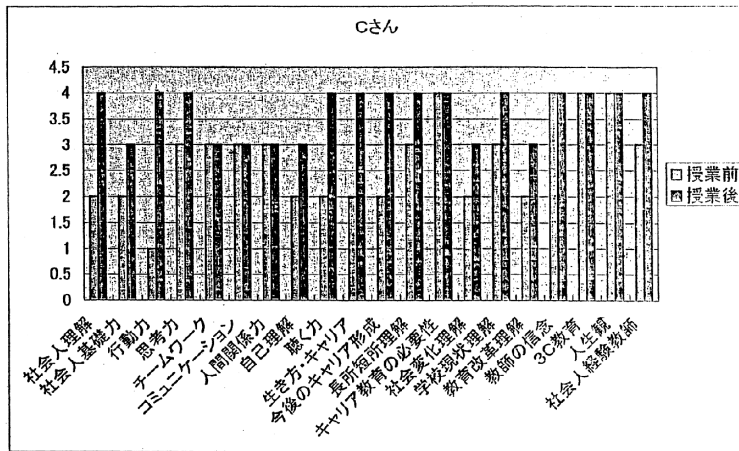
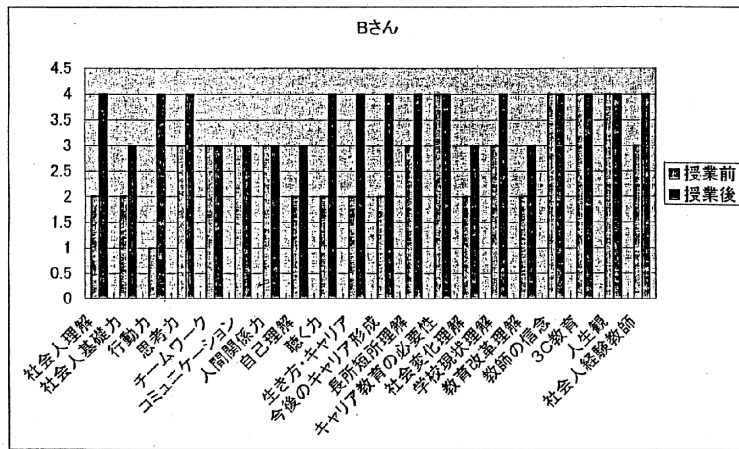
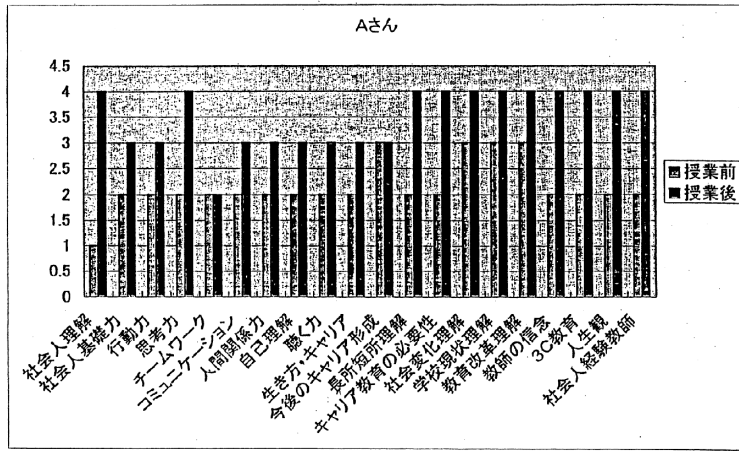
このアンケートは授業前と授業後で同じ調査を行い、どのような変化があったかを科学的に分析研究し、今後の授業改善につなげるものです。成績評価とはまったく関係ありませんので率直、正直に教えてください。

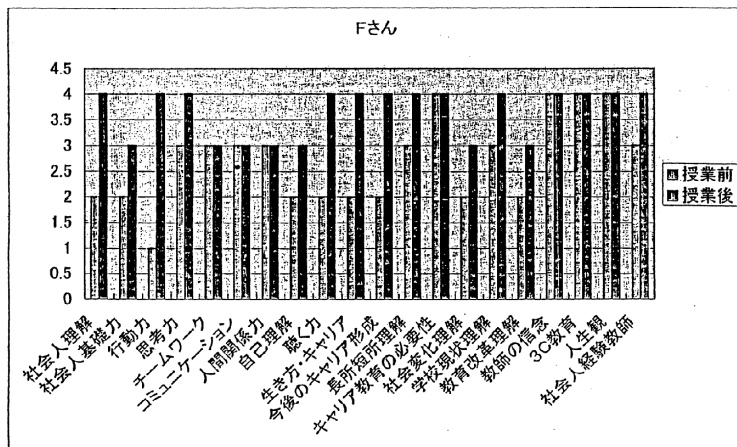
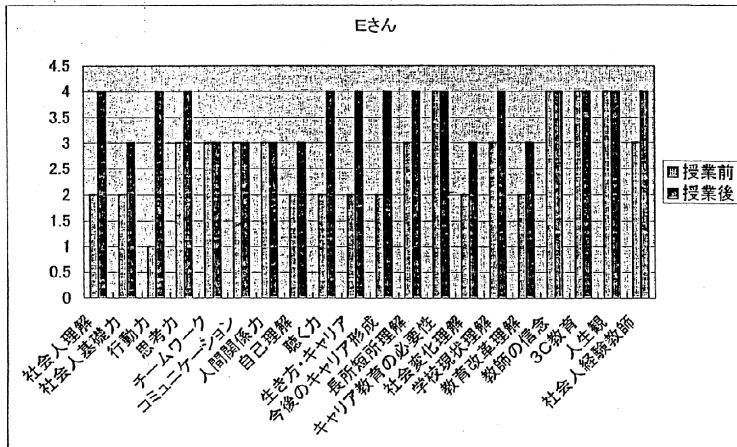
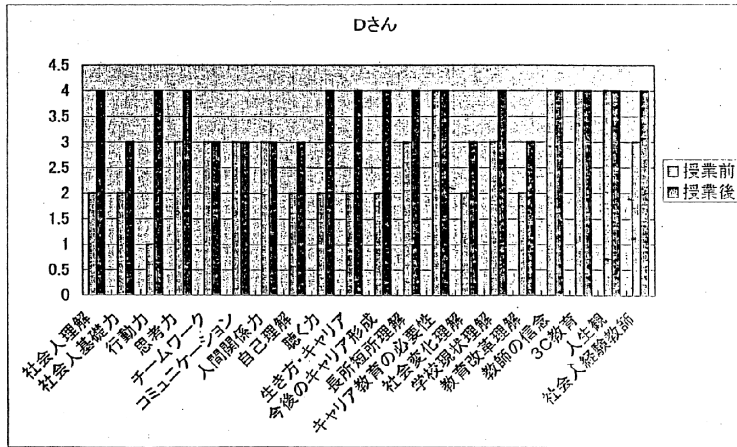
*評価の基準は

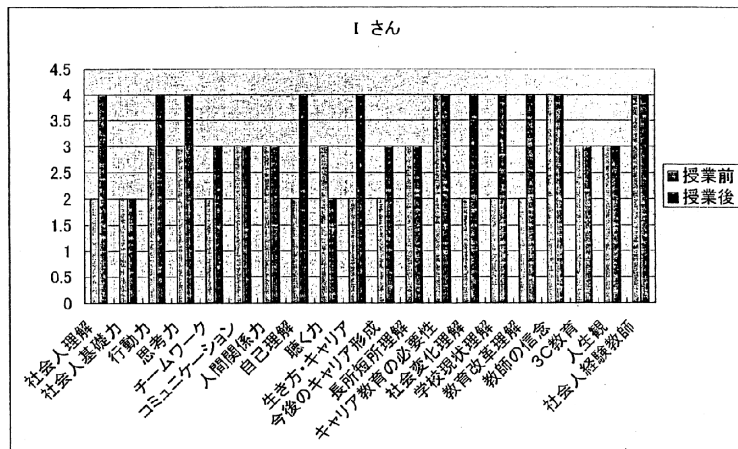
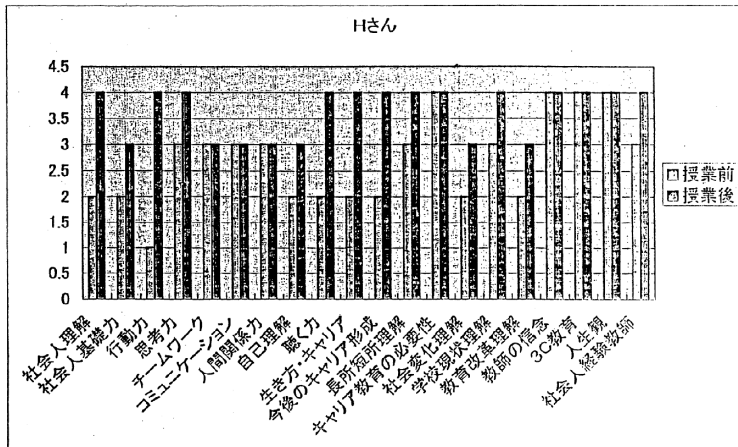
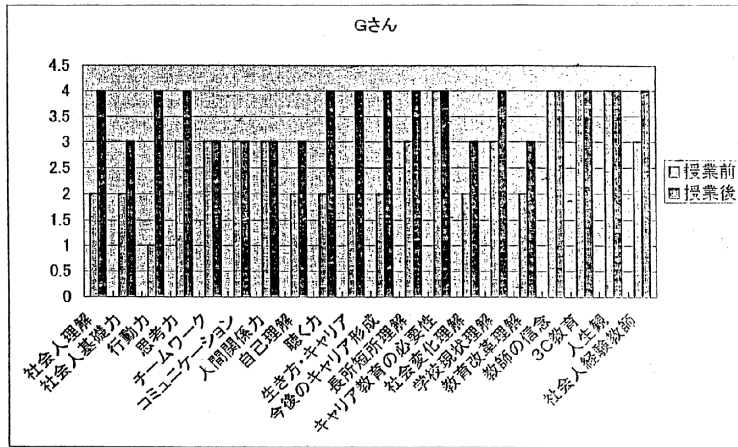
1. 強くそう思う 2. だいたいそう思う 3. あまりそう思わない 4. まったくそう思わない、の4段階で評価してください

1. 社会人とは何かについて明確に理解・認識している	1・2・3・4
2. 社会人基礎力（アクション・シンキング・チームワーク）が身につけていると思う	1・2・3・4
3. 行動力に自信がある	1・2・3・4
4. 思考力に自信がある	1・2・3・4
5. チームワークに自信がある	1・2・3・4
6. コミュニケーション能力に自信がある	1・2・3・4
7. 人間関係能力に自信がある	1・2・3・4
8. 客観的に自己理解・自己認識できる	1・2・3・4
9. 他人の話をよく聴くことができる	1・2・3・4
10. これまでの自分の生き方・キャリアを理解している	1・2・3・4
11. これからのキャリア形成について考え、実行している	1・2・3・4
12. 自分の強みや長所・短所を理解、認識している	1・2・3・4
13. 学校におけるキャリア教育の充実は大事である	1・2・3・4
14. 時代・企業・社会・子供の変化を理解している	1・2・3・4
15. 学校教育現場の現状・困難さを理解している	1・2・3・4
16. 教育改革の歴史と必要性を理解している	1・2・3・4
17. 教師になることについて信念・情熱をもっている	1・2・3・4
18. 日本の伝統文化教育や国際平和教育、市民教育に関心がある	1・2・3・4
19. 自分なりの価値観、人間観、人生観をもっている	1・2・3・4
20. これからは社会人経験のある教師が必要であると思う	1・2・3・4

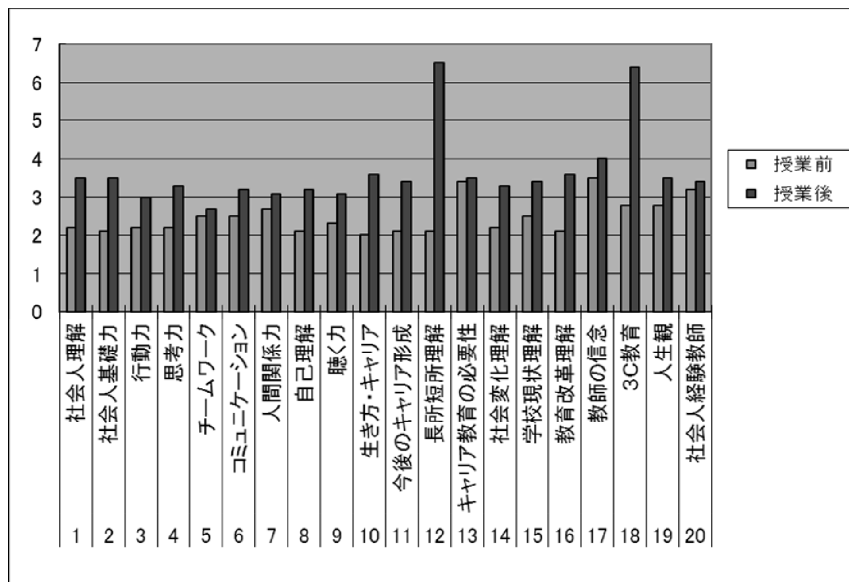
図表 3







図表4



個人別に見て見ると、多少の個人差はあるが授業前後である程度の変化が見られた。前半質問項目（社会人基礎力関連）と後半のキャリア教育関連項目の伸びはともに大きく、一応、授業の目標は達成されたとみることができる。ただし、後半のいくつかの項目はほとんど変化が見られなかった。それらの項目は「キャリア教育の必要性」「教師の信念」「3C教育」「人生観」「社会人経験教師の必要性」等である。これらの項目は、本学の特徴及び単位なしの特別授業を自主的に受けた学生たちであるから、初めから意欲・信念も高く、当然の結果であると考えられる。この結果で注目すべき点は、個人別で見ると授業前後で逆に評価がマイナスになった（つまり授業後に評価が下がった項目）で、2010年前期一人だけが「聴く力」でマイナス評価をしている。これは、直接学生にリサーチしてみると「これまで自分はヒトの話を聞くほうで、聞く力はあると思っていたが、ロールプレイ等で、本当に心からヒトの話を“聴く”ことは難しいことがわかったから」と説明してくれた。このことは、評価が逆になることも「教育成果・授業成果」であると考えられ、授業評価の難しさを示唆している。

次に、全体的傾向を見てみると、全体的に各項目すべてにおいて変化が見られるが、最も変化・伸びの高かった項目は「自己の長所・短所理解」と「3C教育（伝統文化・国際平和・シティズンシップ教育）」である。このことは、自己理解のなかでも「長所短所理解」がこれまで不十分であったことまた、伝統文化教育や国際平和・シティズンシップ教育等についてもこれまでの学習が不十分であったことを示唆している。

また、「社会人理解」「教育改革理解」「社会変理解」等は、知識レベルの理解であるから、講義である程度成果を挙げることが可能であるが、「行動力」「思考力」「チームワーク」「コミュニケー

ション」「人間関係力」等は、行動レベルであるから、「気づき支援」のための様々な体験学習法を活用したにもかかわらず、体得させることの困難さを示唆している。さらに、比較的長い時間を必要とすることを示唆している。

「社会人基礎力」を別個の授業として設置することも可能であるが、筆者の考えでは、「キャリア教育」を知識レベルではなく実践行動レベルで行うには「社会人基礎力」を組み込んだほうが効果的であると思われる。今回、初めて「社会人基礎力」を従来の「キャリア教育科目」シラバスに組み込んでみて、授業の流れはスムーズであり、また、学生の「授業感想レポート」と「図解」によれば、「社会人基礎力」と「キャリア教育」が融合したかたちで役立つことが伺える。（紙数の都合で事例は割愛する）今後、さらにその相互関係を分析、研究していきたい。

4. 今後の課題 —いくつかの事例を参考にして

「社会人基礎力」と「キャリア教育」の統合の試みは、いくつかの大学で実践されている。ひとつは北海道、国立大学法人「小樽商科大学」のキャリア教育科目「エバーグリーン講座」においてである。小樽商科大学は、早くからキャリア教育に積極的に取り組み、2006年に教育開発センター内にキャリア教育開発部を設置し、「キャリアデザイン10年支援プログラム」を展開してきた。これは、入学前3年間—大学4年間—卒業後3年間という長期間にわたって学生のキャリア形成を支援しようという、独創的な試みである。このプログラムは①高大連携事業②学内コア事業③地域・企業等連携事業の3つから構成されており、②学内コア事業はさらに1. 総合科目「社会科学と職業」2. 総合科目「エバーグリーン講座」3. 就職支援事業の3つから成り立っている。これらの一貫した体系的キャリア教育システムの中で、総合科目「エバーグリーン講座」は、卒業生の幅広い実社会の体験を聴くことで、受講生各自が社会の実態に触れ、グローバルな視点を持つ必要性を実感してもらうためのオムニバス講義である。緑丘会（小樽商科大学同窓会）の全面協力により実施されている。しかし、単に卒業生を呼んでの講演というのではなく、以下のようなプロセスを踏んでいる。①事前評価（社会人基礎力自己評価シート）・②事前課題（講義テーマに関する予習）③当日課題（コメント・質問の記入）④相互評価（講演終了後、ヒアリングシートの交換により、社会人基礎力の発信力・傾聴力・主体性・課題発見力の4つの視点から相互評価を行う）⑤事後評価（プログラム終了時に再度、社会人基礎力の自己評価シートを実施）。この「社会人基礎力」を組み込んだオムニバス方式の「キャリア教育」は、きめ細かな指導とともに注目に値する¹³⁾。

もうひとつは、追手門学院大学の実践事例である。追手門学院大学は、2004年度から独自のキャリア形成支援プログラムをスタートさせ、2007年には「追大型自主自立キャリア支援モデルの展開」で現代GPに採択され、4年間の計画的・継続的キャリア教育を実践してきた。そのなかで「追手門型エンパワメント・アプローチによる就職支援モデル」を展開し、「社会人基礎力」とキャリア教育の統合を試みている。そして、独自の「社会人基礎力尺度」を作成し、就職・キャリア支援プロ

グラムやキャリア教育科目への授業の参加度を測定し、それらの相関関係を分析している。その結果から、社会人基礎力と就職・キャリア支援プログラムやキャリア教育科目との相関関係は有意であると結論づけている¹⁴⁾。

また、加澤恒夫(2005)は「現代日本における大学教育のパラダイム転換の必要性に関する一考察：大学教育の中核としてのキャリア教育論」で、大学におけるキャリア教育の現状と課題を整理し、曖昧化した大学教育の目的ならびに、各高等教育機関の制度上の境界の危機を超克し、<学士課程教育>の真の充実のために、大学教育のパラダイムを転換し、個々の教員が自らの教育活動において自覚的・積極的にキャリア教育を実践する必要がある」と主張している¹⁵⁾。筆者も同感であり「パラダイム転換としてのキャリア教育」を実践するためには、「社会人基礎力」という実践力・行動力の育成を組み込む必要があると考えられる。

たとえば、茨城大学・教育学部の「教師のキャリアデザイン」という教職科目の授業シラバスは以下のようになっている。

- ①キャリアを歩むことの意味
- ②キャリアデザイン理論1
- ③キャリアデザイン理論2
- ④生涯キャリア発達課題
- ⑤教師としてのキャリアと生涯学習を考える
- ⑥わが国におけるキャリア教育の成立とその意味
- ⑦キャリア教育の理論と実践への活用
- ⑧キャリア教育で育成をめざす能力
- ⑨職業観・勤労観と教育課程とキャリア教育
- ⑩卒業後の進路の選択決定への支援
- ⑪キャリア教育を推進する組織論
- ⑫学校におけるキャリア教育実践・小中高学習プログラム実践例の検討(1)
- ⑬学校におけるキャリア教育実践・小中高学習プログラム実践例の検討(2)
- ⑭社会教育計画としての教員研修プログラム実践例の検討
- ⑮生涯学習社会におけるキャリアデザインと教育実践の課題

このシラバスは、到達目標として、「①キャリアデザイン理論の理解 ②学校におけるキャリア教育の意義・内容の理解 ③生涯学習との関連で自分自身・教師としてのキャリア形成の考察を深め、意識化を図ること」の3つが挙げられている。目標が「知識修得・理解・意識化」という従来の教育・学習の枠にとどまっており、「実践・行動力育成」というパラダイムの転換は存在していない。

「キャリア教育」の授業の中には「社会人基礎力」を含む「学びと行動の統合」や「実践・行動力育成」がなければ「知識・理解教育」に終始し、実践的で効果的な「キャリア教育」にならない可能性がある。「キャリア教育」の本質は「教育・授業改革」にあり、知識や理解・意識だけではなく

実践力や行動力、態度（つまり前述した基礎的汎用的8能力）を育成することが授業目標となるべきであると考えられる。本研究は、「社会人基礎力」と「キャリア教育」がめざす「基礎的汎用的能力」との相互関連性を示唆するもので、より直接的相互関係構造の分析については今後の課題としたい。

- (注1) 経済産業省「社会人基礎力に関する研究会・中間取りまとめ」2006・1・20
- (注2) 「大学が育む社会人基礎力とは」カレッジマネジメント151（リクルート）2008年7・8月号46～47P
- (注3) 文科省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」報告書2004・1
- (注4) 中教審第1回キャリア教育・職業教育特別部会配布資料2009・1・16
- (注5) 経産省 社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」2006・1・20
- (注6) 寿山泰二「キャリア教育と職業能力」京都創成大学紀要第7巻 2007 60～66P
- (注7) 梶原 宣俊「情報リテラシー教育の実践と理論」『専門学校教育論ー理論と方法』1993 学文社 94～115P
参照
- (注8) KJ法とは文化人類学者川喜田二郎が1960年代に開発した、カードによる情報整理、問題解決手法で、1970年代に企業や団体に普及した方法である。現在でも一部の人々によって様々な活用、応用されている。川喜田二郎『発想法』1967 中公新書参照
- (注9) 筆者が長年実践し、開発してきた読書図解法で、大事な文章をカードに書き抜き図解化し、文章化する方法。「PISA型読解力」の解釈・熟読・評価力を高める方法として有効である。日本創造学会第31回研究大会2009・10・17発表「PISA型読解力を育成する読書図解法」参照。
- (注10) 「カード式キャリアデザイン法」については拙論「大学における創造的キャリア教育の実践ーカード式キャリアデザイン法によるキャリア形成と就職支援」日本教育大学院大学研究紀要「総合教育研究第2号」第2号2009 113～134P参照
- (注11) AIAとは「心の冒険」という意欲開発・生涯設計プログラムで（株）グループダイナミックス研究所によって1980年代企業内教育に普及した。ポブ・コンクリン『自信が湧く』産能大 参照
- (注12) 杉本厚夫ほか『教育の3C時代ーイギリスに学ぶ教養・キャリア・シティズンシップ教育』2008・11世界思想社参照
- (注13) 小樽商科大学地域研究会編『大学におけるキャリア教育の実践ー10年支援プログラムの到達点と課題』2010・3・20 ナカニシヤ出版 参照
- (注14) 追手門学院大学「追手門型エンパワメント・アプローチによる就職支援モデルの展開」平成21年度報告集 2010・3・31 23～38P
- (注15) 加澤恒夫「現代日本における大学教育のパラダイム転換の必要性に関する一考察：大学教育の中核としてのキャリア教育論」広島大学高等教育研究開発センター 大学論集第37集（2005年度）2006年・3月刊、加澤は、日本の高等教育システムを構成する大学院、専門職大学院、4年生大学、短期大学、高等専門学校、専修学校が自らの個性・特色を相対化することによって、境界や使命・役割が曖昧化し大きな危機が生じており、高等教育システムの再構築が必要であると主張している。

Practice-based Report

A Trial on Integration of Social Literacy and Career Education
—by Practice on a Graduate University

Kajiwara, Nobutoshi

[Social Literacy or Skill] was demanded for school education from the ministry of economy and industry in 2006. Although the trial Social Literacy or Skill lesson on university, Social Literacy or Skill] must be include of Career Education fundamentally. I tried to integrate of [Social Literacy or Skill] and Career Education, developing the original textbook and the method. I will suggest and consider the possibilities of integration [Social Literacy or Skill] and Career Education,
